



SUCRA さくら
学術情報発信システム / 埼玉県地域共同リポジトリ

Institution	文教大学
Title	家政学の概念的枠組み
Author	福田, はぎの
Citation	新版家政学事典（日本家政学会編, 朝倉書店, 2004.7） p.2
URL	http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=BKK0000985

- SUCRA に登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社(学協会)などが有します。
- SUCRA に登録されているコンテンツの利用は、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合は、著作権者の許諾を得てください。ただし、著作権者から著作権等管理事業者(学術著作権協会、出版者著作権管理機構など)に権利委託されているコンテンツの利用手続きについては、各著作権等管理事業者に確認してください。

1.1 家政学の学際的視野

1.1.1 家政学の概念的枠組み

a. 家政学的发展と課題 家政学は家庭生活改善に向け日常生活に科学を適用する分野として20世紀初期アメリカで誕生し、日本では家事技術中心の自生的女子教育近代史を経て、第二次大戦後の女性への大学門戸開放という転換期に、大学教育・研究分野としてその第一歩が踏み出された。現在、家政学原論、家庭経営、家族関係、児童、食物、被服、住居、家政教育などの専門領域を擁し、各領域が専門知識を基盤に固有の研究・教育活動を行っていることは、家政学の半世紀の成果である。しかし将来に向けては次のような基本的な課題もある。

対内的には、家政学の統合力という視点から専門諸領域間の協力関係を強化するという課題がある。対外的には家庭生活および消費者、市民、勤労者としての個人・集団に対し家政学が行うサービス内容をいっそう明確にし、実践すること、また企業や行政などの他の社会部門への影響力を高めることなどがあげられる。これらはいずれも家政学の社会的存在意義をいっそう明確にするという、より大きな課題の下にある。家政学の現代的概念枠組みも、これらの諸課題を乗り越えられるようなものでなければならない。

b. 家政学の現代的概念枠組み 家政学はその生成の歴史から、また現代でも諸科学・学問の単なる集合体ではなく、人々の生活が必要とする共通の目的のために、複数の科学・学問を有効に用いる、社会に向けて実践的な目的志向の分野である。その専門領域構成は、家政学が家庭生活の諸側面（個人、家族などの人的側面、衣食住などの物的側面そして経営体的側面）に即して分化＝発展してきたことを示し、その枠組みは基本的に現実の家庭生活の内容と形態に規定づけられたものである。各専門領域は、それぞれの基礎科学に立脚した特定の科学・学問としての発展方向を内包するが、その成果が社会的実践の課題解決へと結実しなければ、家政学の構成部分とはいえない。家政学は家庭生活という人間の本質的な経験的事象を成立基盤とするとともに、実践においては家庭生活と科学・学問の間において、両者の相互規定的発展に対する有能な媒介者として存在する。

家政学の実践的課題は現実の家庭生活からもたらされる。したがってそれは家庭生活の歴史的变化とともにある。かつて家政学生成期には産業化の恩恵に家庭

も与かるよう家庭自体の物質的向上が基本的課題であった。しかし1世紀を経た現在は状況が大きく変わっている。大衆消費市場の定着以降、家庭の物質的豊かさは人間的豊かさを必ずしも保証しないことが判明しただけでなく、より一般的に、社会的経済・政治環境と家庭生活の間には複雑な相互規定関係があり、この関係の展開のなかで家庭生活の課題が生起していることが明確になった。今や、家政学の視野は、子どもや高齢者あるいは市民、消費者、勤労者として人々が普段に遭遇する日常生活と生涯の多様な場面に広がっている。またその主要な関心は、経済・政治環境優位の時代変化が生活者不在のまま家庭生活・日常生活を改変し、あるいは子どもや高齢者を未成熟または脆弱な意思決定者のままで市場に誘引し、総じて人間の主体的契機や自立性を不安定化させ、場合によっては根底から揺るがしかねないことに置かれている。

現代家政学は、人間が各ライフ・ステージまたは生涯において受けるさまざまな社会的拘束から解放され、より主体的・自立的に生きるという生活目標を人々と共有している。この目標をめぐる専門諸領域が科学を協力的かつ有効に用いることで家政学の統合力は強化される。また科学を用いる個々の具体的な目的と場面（研究、教育、職業人養成、消費者支援プログラムなど）に応じて、直接的な対人的支援サービスを通じ人々をエンパワーし、さらに生活目標達成を阻むような問題の改善に向け政府や企業に影響力を及ぼすことで、家政学の存在意義と役割を社会に向かって示すことができる。そしてこうした社会的活動を通じて、現代家政学は第一に自らを批判科学（critical science）として再定義できる。科学の対象に即した従来の自然、社会、人文科学という分類に対し、批判科学は科学の利用方法に即して分類されたものであり、特に人々を支援する社会的実践に向かって科学＝専門知識を組織化・統合化する枠組みを与えている。第二には、家政学という分野が一つの専門としての発展方向を示すことができる。専門とは使命感とモラルをもち、科学的根拠のある実践を通じ社会貢献を果たす努力分野を意味している。家政学は単一科学・学問ではなしえないような問題解決能力を備えることにより、人々の家庭生活・日常生活に対し固有の学際的視野を切り開き、専門としての軌跡を未来に向かって描くことができる。

文献

- 1) 日本家政学会家政学原論部会訳：家政学 未来への挑戦，建帛社，2002.

(福田はぎの)